

コリントの信徒への手紙一

シリーズ～新約聖書入門～

広島弁訳新約聖書

2017/9/10

パウロが1年半滞在して宣教した町

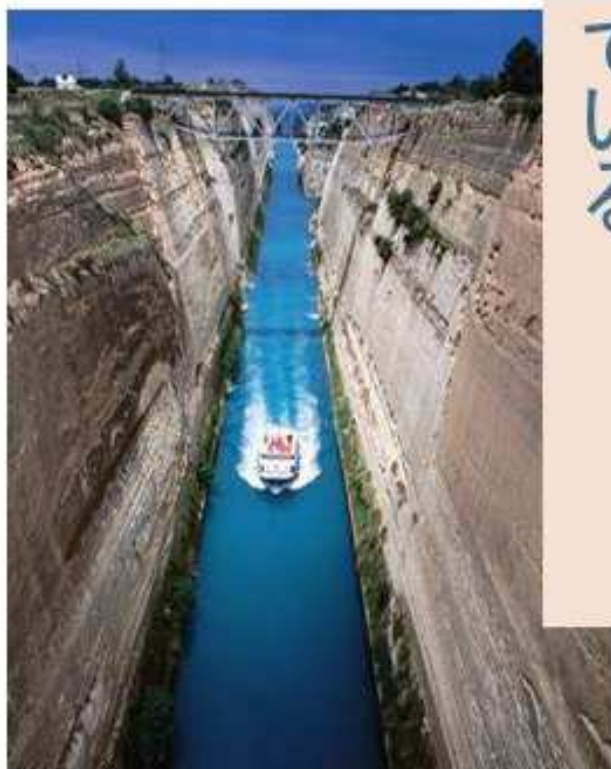
- 第2宣教旅行の際に行った

- 「その後、パウロはアテネを去ってコリントへ行った。」使徒18:1

- ユダヤ人の激しい抵抗にあったが、主が直接励まされた

- 「ある夜のこと、主は幻の中でパウロにこう言われた。『恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ。』パウロは1年6か月の間ここにとどまって、人々に神の言葉を教えた。」18:9-10

地中海の交通の要所



今は運河になっ
ている



豊かだが道徳的に退廃した町

二つの港の間を
陸路でつないだ

コリント地峡 約8km

問題だらけの教会

• 教会で起こっていた問題

- 分派・分裂(1～4章)
- 不道德・結婚の混乱(5～7章)
- 食べ物(偶像に献げた肉)(8～10章)
- 礼拝の混乱・聖霊の賜物(11～14章)

• 原因は？

- 信徒の未成熟
- 地域からの影響
- 指導者の指導力不足(テモテを送る)

コリントの信徒への手紙一

～堀川寛による広島弁訳～

(広島弁訳の意味) (訳者の解説・蛇足)

第1章

神様のご意志によって呼び出され、イエス様の使徒にしてみろうたパウロと、兄弟ソステネから、コリントにある神様の教会へ。あんたらは、私たちの主イエス・キリスト様の御名を呼び求めとるすべてのもん(人)らと共に、キリスト・イエス様によって聖められ、聖徒として呼び出されたんじゃ。キリスト様は、わしらみんなのご主人様じゃ。わしらのお父様である神様と、主イエス・キリスト様から恵みと平安があんたらの上にあるように。

わしは、キリスト・イエス様によってあんたらが神様の恵みを頂いたことを、いっつも神様に感謝しとるんでえ。あんたらはキリスト様に包まれて、言葉においても、知識においても、あらゆる点において豊かにされたんじゃ。そのおかげで、キリスト様についての教えが、あんたらの中で確かになった。ほいで、あんたらは賜物に何一つ欠けることがなく、わしらの主イエス・キリスト様の現れて下さるのを待ち望んどる。主イエス様も、最後の日まであんたらを責められるところのないもん(者)として支え続けて下さるじゃろう。神様の真実は、あんたらを、神様の御子、わしらの主イエス・キリスト様との交わりに招き入れて下さった。

(あいさつはそれぐらいにして)兄弟たちよ、わしらの主イエス・キリスト様に代わってきびしゅう言うで。あんたら、好き勝手言わず、仲間割れせず、調和を保って、思いを一つにしんさい。わしの兄弟たち、クロエの家のもんが、あんたらが仲違いしとる言うてきたんよ。あんたらはめいめいに、「わしゃあパウロ派じゃ」「わしゃあアポロ派じゃ」「わしゃあペトロ派じゃ」「わしゃあキリスト派じゃ」言うとるらしいじゃないか。いつからキリスト様がバラバラにされたんか!パウロがあんたらのために十字架に磔になったんか!あんたらはパウロの名によって洗礼を受けたんか!確かわしはクリスボとガイオ以外はあんたらに誰にも洗礼を授けとらんはずじゃ—神様に感謝します—。ほいじゃけえ、わしらの名によって洗礼を受けた言えるもんは誰もおらんはずじゃ。そういやあ、ステファナの家のも

んにも授けたかいのう、まあ他にはおらんはずじゃ…。キリスト様がわしを(あんたらの所に)遣わされたんは、洗礼を授けるためじゃのうて、福音を告げ知らせるためじゃった。それも、キリスト様の十字架が無意味にならんように、知恵の言葉を用いちゃあおらん。

十字架のメッセージは、滅びに向こうとるもんにはバカバカしいかもしれんが、わしら救いに向こうとるもんには神様の力じゃ。(旧約聖書に)こう書いてあるじゃろう。「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さを意味のないものにする。」賢いもんはどこにでもおる。学者もどこにでもおる。この世の評論家もどこにでもおる。神様はこの世の知恵を愚かなもんにしんさった。この世はどんだけ知恵を尽くしても自分で神様を知ることにはできんかった。それは神様の作戦通りじゃ。神様は、バカバカしいと思われるような宣教の言葉によって、信じる者を救おうとされたんじゃ。ユダヤ人は証拠を見せえ言うし、ギリシア人は知恵にこだわる。わしらは、十字架に磔になったキリスト様を宣言する。ユダヤ人にとっちゃあつまずき、異邦人にとっちゃあバカらしい話、ほいじゃが召されたもんにとっては—ユダヤ人でもギリシア人でも—、神様の力、神様の知恵じゃ。神様の愚かさは人の賢さに勝り、神様の弱さは人の強さに勝る。

兄弟たち、あんたらが召されたときのことを忘れたんか!賢いもんもおらんし、権力者もおらんし、身分の高いもんもおらんかった。ほいじゃが、神様は賢いもんらに恥をかかせるために、この世の愚かなもんを選び、強いもんらに恥をかかせるために、この世の弱いもんを選ばれたんじゃ。身分の高いもんを無力にするために、どこの馬の骨か分からんような、愚かで弱いもんらを選ばれた。そりゃあもう。肉あるもんを誰一人神様の前で誇らせんためよ。神様のおかげであんたらはキリスト・イエス様に包まれとる。キリスト様こそ、わしらにとっての神様の知恵であり、義しさであり、聖さであり、贖いそのものじゃ。「誇る者は主を誇れ」と(旧約聖書に)書いているとおりじゃ。

第2章

兄弟たち、わしがそっちへ行った時、神様の奥義を伝えるのに、格調高い言葉や知恵は使わんかった。なんでか言うと、わしはあんたらに、イエ

ス・キリスト様、それも十字架に磔になられたキリスト様以外知らせることはせんと決めとったけえじゃ。あんたらの前じゃあ、わしああ弱々しゅうて、自信なさげで、震えとった。わしの言葉もわしの宣教も、説得力のある知恵に溢れたもんじゃのうて、霊と力の表現じゃった。そりゃあもう、あんたらが人の知恵によってじゃのうて、神様の力によって信じるようになるためじゃ。

ほいじゃが(しかしながら)わしらは、(信仰者として)成熟したもんには知恵の言葉を使う。もちろんこの世の知恵でなく、滅び行くこの世の支配者の知恵でもない。わしらが語るんは、隠された奥義としての神様の知恵で、わしらを栄光にあずからせるために、世界の始まる前から定められとったもんじゃ。この世の支配者は誰一人この知恵を知とらんかった。もし知とったら、栄光の主を十字架に磔にすることはなかつたじゃろう。「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかつたことを、神は御自分を愛する者たちに準備された」と(旧約聖書)に書いてあるとおりじゃ。わしらには、神様が御霊によって啓示して下さった。御霊はあらゆることを究め、神様の深みにまでも及ばれるんじゃ。人のことは人の内にある霊だけが知とる。同じように、神様のことは神様の霊だけがご存じじゃ。わしらは、この世の霊じゃのうて、神様からの霊をいただいた。そのおかげで、神様からタダで与えられたもの知ることができたんじゃ。ほいで、わしらがこのことについて話すんも、人間の知恵が教える言葉でじゃのうて、御霊に教えられた言葉を使う。霊のことは霊の言葉だけが説明可能じゃ。生まれながらの人間は神様の霊の教えを受け入れん。愚かで、理解できんけえじゃ。御霊のことは御霊によってはじめて理解できる。御霊を受けとる人は御霊によって一切をわきまえ、誰の助けも借りることはない。「だれが主の思いを知り、主を教えるというのか。」ほいじゃがわしらはキリスト様の心をもととる。

第3章

兄弟たち、わしはあんたらには、(残念ながら)霊に属する人に対してじゃのうて、肉に属する人に対して、つまり、キリストにある幼子に対するように話さにゃいけんかった。わしあああんたらに乳

を飲まして、固い食べ物はやらんかった。まだ無理じゃったけえじゃ。今もまだ無理じゃのう。あんたらまだ肉に属しとるけえじゃ。(考えてもみい)妬みや争いが絶えんいうことは、肉に属する、何も変わつとらんただの人として生きとるということじゃ。あるもんは「わしあパウロ派じゃ」言うて、他のもんが「わしあアポロ派じゃ」言うてよるようじゃあ、ほんまにただの人じゃ。アポロたあ(とば)何もんなら。パウロたあ何もんなら。こんには(この人たちは)、あんたらを信仰に導くための僕で、主に与えられた仕事をしたにすぎん。わしは植え、アポロは水をやった。ほいじゃが、成長させて下さったんは神様御自身じゃ。重要なんは、植えるもんでも、水をやるもんでものうて、成長させて下さる神様じゃ。植えるもんと水をやるもんは同じ目標を持つとるが、報酬は働きに応じて別々に受け取る。

わしらは神様のための同労者で、あんたらは神様の畑、神様の建物じゃ。わしは、神様からの恩恵によって、熟練した建築家のように土台を据えた。ほいで、他のもんらがその上に家を建てよう。どがいにして(どのようにして)建てるか、ようよう気をつけえよ。(当然のことながら)イエス・キリスト様以外の土台を据えることはできん。この土台の上に、それぞれが金、銀、宝石、木、草、わらで家を建てるんじゃが、その仕事は世の終わりの日に明らかになる。その日は炎と共に現れ、炎によってどんな仕事をしとったか、吟味されるんじゃ。土台の上に立てた家が残りゃあ、ええ仕事をしたことになるが、焼け落ちてしもうたら、だめな仕事じゃったことになる。中に住んどるもんが助かるには、火の中をくぐり抜けんにゃいけん。あんたら、自分が神様の神殿で、神様の霊が自分らの内に住んどっての事を知らんのんか(知らないのか)!神様の神殿を汚すもんがおりゃ、神様はそんな(その人)を滅ぼされる。神様の神殿は神聖なもんじゃけえ。あんたらは“その”神殿なんで。あんたらまちごうても(間違っても)知恵あるもんじゃ思いんさんな(思いなさんな)。もしこの世で知恵者じゃ思うとるんなら、ほんまの(本当の)知恵者になるために愚かになりんさい。この世の知恵は、神様の前じゃあ愚かなもんじゃ。「神は、知恵のある者たちを/その悪賢さによって捕らえられる」と書いてあるし、「主は知っておられる、知恵のある者たちの論議がむなしいことを」とも書い

である。ほいじゃけえ(それだから)、誰も人間であることを誇っちゃあいけん。すべてはあんたらのもんじゃ。パウロもアポロもケファも、世界も生も死も、現在も未来も、み～んなあんたらのもんじゃ。ほいじゃが、あんたらはキリスト様のもんで、キリスト様は神様のもんじゃ。

第4章

ほいじゃけえのう(それだから)、わしらはキリスト様の手足となって働くしもべ、神様の奥義を託された管理者じゃ思いんさい。ここで管理者に求められるんは忠実なことじゃ。わしは、あんたらに裁かれようが、ほかのもんにも裁かれようが、いとうもかゆうも(痛くもかゆくも)ない。げに(いや)わしは自分で自分を裁くこともせん。わしには何もやましいところはないが、それで義しいとされるわけじゃあない。わしを裁かれるのは主じゃ。ほいじゃけえ、主が来られるまでは、先走って裁いちゃあいけん。主は闇に隠されとる事を明るみに出し、心の企ても暴かれる。そんなとき、神様からのご褒美が待っとるじゃろう。

兄弟たち、あんたらのために、わし自身とアポロに当てはめて説明してきたが、そりゃあのう、あんたらが「書かれているもの以上に出ない」ことを学ぶためじゃし、誰か一人を重んじて他の人を軽んじたりせず、高慢にならんためじゃ。あんたら、いつからほかのもんよりえろう(偉い)なったんか。あんたらの持っとるもんで、誰かからもらっとらんもんがあるんか。(全部もろうたもんじゃろう)。ほんなら何でもろうとらんような顔をして、いばっとるんか。あんたらははあ(既に)満腹で、はあ大金持ちになって、わしら抜きで王様になってしもうとる。いっそのこと王様になったらどうなんな。ほしたらわしらも王様にしてもらえたんかのう?よう考えてみたら、神様はわしら使徒を、まるで死刑囚みたいに行列の一番目立つところに置きんさった。わしらはこの世にも、天使らにも、人間らにもさらし者にされたんじゃ。わしらはキリスト様のために愚かもんになり、あんたらはキリスト様を信じて賢いもんになっとる。わしらは弱いが、あんたらは強い。あんたらは重んじられとるが、わしらは軽んじられとる。今の今までわしらは、飢え、渴き、着るもんもなく、ぶんなぐられ、宿なしで、それでもやねこい(苦勞)思いをしてもわが手で稼いどる。呪

われたら祝福し、迫害されたら堪え忍び、ののしられたら励ましの言葉をかけとる。今に至るまで、わしらはこの世のゴミ、人間の屑じゃ。

こがいな(このような)ことを書くんはのう、あんたらに恥をかかせるためじゃのうて、大切な子どもとして躰けるためじゃ。あんたらにキリスト様のための養育係が一万おったとしても、父はようけ(大勢)おらん。(はっきり言おう)わしが、キリスト・イエス様において、あんたらを生みだした父親じゃ。げに(そこで)、よう聞けえよ、わしのようになりんさい。テモチをそっちに行かした。テモチは、主にある忠実なわしの子じゃ。わしがすべての教会で教えとること—キリスト・イエス様に包まれて生きる生き方—を、あんたらに思い起こさせてくれるじゃろう。わしがあんたらの所へ行くことはない思うて、高ぶっとるもんがおるらしいじゃないか。主がお許し下さるなら、わしあすぐにでもあんたらの所へ行くで。ほいで、高ぶっとるもんらの、言葉じゃのうて力を見せてもらおうじゃないか。神の国は言葉じゃのうて力にあるじゃけえのう。あんたらはどっちを望んどるんか。鞭を持って行くことか、愛と優しい心で行くことか。

第13章

わしはあんたらに更に優れた道を示そう。

たとえわしが、人の異言や天使の異言を語ったとしても、愛がなかったら、やかましい鐘や、うるさいシンバルとおんなじじゃ。たとえわしが、預言の賜物を持ち、すべての奥義と知識に通じとつても、たとえわしが山を動かすほどの信仰をもつとつたとしても、愛がなかったら何の意味もない。あるいはわしが、全財産を貧しいもんら(人々)に施し、この体を焼かれるために渡しても、愛がなかったら、何の利益もない。

“愛(本物の愛)”は我慢強い。愛は優しい。人を妬まん。愛は自慢したり、偉そうにしたりせん。礼儀をわきまえ、がめつうなく(けちでなく)、いらいらせず、いつまでも恨んじゃあおらん。曲がったことを嫌い、まっすぐなことを好む。どんなことにも耐え、信じ続け、希望を捨てず、けっしてあきらめん。

愛は絶対に廃れはせん。預言は不要になり、異言は終わり、知識も不要になる。わしらの知識はごく一部で、預言もごく一部じゃ。完全なもんが現れたら、部分的なもんは要らんようになる。

子どもの時には子どものように話し、感じ、思うと
った。ほいじゃが(しかし)、大人になったら子ども
らしさは棄てた。わしらは今、鏡に映った(昔の鏡
ははっきり映らなかった)ぼんやりした姿を見とる。
ほいじゃが時が来たら、顔と顔を合わせて見るこ
とになる。今は一部しか分からんでも、その時に
は、-わしらが全部知られとるように-全部がはっ
きり分かるようになる。

ええか、信仰と希望と愛、これら三つはいつま
でもなくならん。最も偉大なんは愛じゃ。